月が煌めく夜に

descriptioner

ミルクティを求めて

ベッドの上で寝っ転がりながら窓の外を眺めていた。
・・・・・・・・・・・
あぁ〜温かいミルクティが飲みたい！
みんなはもう眠っている時間だというのに独り欲求不満で眠れない。
夜が明けるまで我慢して眠ろうとがんばったが…こうして目が覚めている。
だったら素直に買いに行って飲んだ方がすぐ眠れるんじゃないか？
よし、買いに出よう！
自分の体温が籠ったベッドから寒いのを我慢して立ち上がる。
外はもっと寒そうだからパジャマの上からジャンバーを着て、財布をそのポケットに突っ込み家を出た。
ミルクティなら何の銘柄でもいいわけじゃない、僕が飲みたいのは世界三大銘茶の一種ウバ茶葉で淹れ十勝産牛乳と電気分解製法で混ぜた上品な甘さの他よりちょっと高価な「紅茶加電」
だが、その品を売っている自販機へ最短で行くには間に在る香久山の抜け道を通らなければならなかった。

月と美女

仕方なく香久山の抜け道を登っていく。
電灯なんか一つも無いけど月光が夜道を優しく照らしてくれる。
時折り吹く風に木々がカサカサ笑ったり、どこからか変な鳴き声が聴こえてくる。
なんとなく魔女でも潜んでいそうな雰囲気だ…。
ポケットの中で手を少し強く握った。

歩き続けること数十分後、やっと林を抜け目的の自販機が見えてきた。
だが…ほとんどのボタンが赤く点灯していた！？
まさかっ、紅茶加電も売り切れでは…。
しかし幸いなことに紅茶加電のボタンは点灯していなかった。
ほっ、せっかくここまで来たのに売り切れじゃ意味がない。
自販機の前に到着した僕は財布から小銭を取り出し投入してボタンを押した。
ガコン！
設定どおり取り出し口に缶が落ちたが、直後に押したボタンが赤く点灯した。
どうやら今買ったのが最後だったらしい…。
待ち望んでいた紅茶加電を飲みながら帰ることにした。

・　・　・　・　・　・　・　・
黙々と歩いていた帰り道の途中、抜け道から少し外れた林の向こうに何かが輝いていた！？
まさか宇宙人が…。
反射的に歩みを止め、呼吸も抑制していた。背中から冷や汗を感じる。
「・・・・・・」
怖いけど何をしているのか見てみたい。しかし、ここからでは目を凝らしてもはっきりとはわからない。・　・　・　・　・
意を決して体勢を屈めながらゆっくりと近づく。
・・・・・!?
なんとそこには発光する何かを纏いながら踊る綺麗な娘が！？
深夜でも起きている人は僕一人だけじゃないんだからありえないことではないが…まさか林の中に踊り子がいるとは…。
電灯とは異なる優しい光の何か、蒼色と白色で彩られた異国風のドレス、髪の隙間や手首で揺れる三日月のアクセサリー。
それに二の腕まで露出した肩や深いスリットからちらほら覗かせる太股にドキドキさせられる！
満月の下で演じられる幻想的な光景。
隠れながら観ていることに罪悪感を感じなくもないが終わるまで目が放せない。
だが秘密の舞台は長くは続かなかった、娘はなぜか舞うのを止めたのだ。

そしてこう呟いた。
「ん～甘くておいしそうな香り♪」
もしかしてミルクティの香りで気づかれた！？
そんなに匂っていないと思うが確実に僕の隠れている方向へ近づいて来る。
やばい！　すごい臭覚だな…。
光る何かが消えた今、ただコオロギの鳴き声だけが暗闇を賑わす。
じっとしていれば見つからないと思ったがもう手遅れのようだ。
逃げるのを諦めて恐る恐る立ち上がる。そして娘の奇妙な瞳と視線が合った。
目の前に現れた僕を見た娘はビクっと驚くしぐさをとり、両手を胸元に当てて口を開いた。
「もしかして…地上の人ですか？」
容姿に負けないぐらい綺麗な声、でも変な質問をされた。
「地上の人？　僕はこの近所に住んでる者だけど。驚かせてごめんね、夢かと思うぐらい綺麗だったから見惚れちゃってさ♪」
「みっ見惚れていたんですか！？」
僕の返事を聞くなり視線を下に逸らし、人差し指をつっ突きながら黙り込んでしまう娘。
照れているのかな？
「どうしてこんな深夜の林で踊っていたの？」
「今宵は休日なのです、だからつい降りて来ちゃったんです☆」
娘はそう言って微笑んだ。
降りて来た？　どこから？　そう訊こうとした直前、
「貴方こそこんな夜更けにどうしたんですか？」
と先に娘の方から訊かれた。
「ちょっとミルクティが飲みたくて買いに行って来たんだ」
「ミルクティ？」
初めて聞く言葉なのか不思議そうに復唱している。
まさか知らないわけじゃ…
「ミルクティって何ですか？」
君はいったいどんな山奥で生活しているんだぁ！？
「え～と…ミルクティとは紅茶にミルクを混ぜて作る甘くて美味しい飲み物だよ」
なるべく簡単に説明してみたつもりだが君の顔はまだわからなそうな表情。
何て言えばわかるのか言葉が想いつかず悩んでいると、
「あの、私にもそのミルクティというものを飲ませてくれませんか？」
すごい興味がありそうな口調で娘が言った。
そっか！　百聞は一飲に如かず、実際に飲んでもらえばわかる！
「ほら、これがミルクティだよ」
そう言いながら缶を差し出すと娘は両手で丁寧に受け取った。
だがすぐには飲まず缶を珍しそうに眺め、それからちょこっと口を付けた。

「とても香り良くて甘い、なんだか幼少の頃に飲んだ母乳みたいです」
気に入ってくれたなら嬉しいが、母乳みたいってすごい例えだな…。
両手でちょっとずつ飲んでいるしぐさがまるで食事するリスのようで可愛い。
本当は僕もまだ飲みたいのだが回し飲みでは間接キスすることになってしまう。きっと君は嫌がるだろうな。
我慢して娘が飲み終わるのを待っていると突然飲むのをやめて缶を差し出してきた。
「すみません、私ばかり飲んでしまって…」
しょんぼりと謝る娘。
あれっ、君は間接キスになることに気づいているのかな？
飲む量は減ってしまったが綺麗な娘に口付けされていると思うと損した気がしない。
二人で味わいながら回し飲みしている内についに残りわずかとなり、最後の一口は娘にあげた。
君と二人きりで過ごしている深夜の林、意識しただけでドキドキする☆
いろいろ話してみたいのになかなか声に出せない…。
・　・　・　・　・　・
「ねえ、君の名前は何て言うの？」
「私の名は天之萌月命と申します」
「あまのもゆつきのみこと？　変わった…というより神様みたいな名前だね」
「そんなまだまだ見習いですよ、長いと思うので"萌月"とでも呼んで下さい」
「確かにちょっと長いからそう呼ばせてもらおうかな」
「貴方のお名前も教えて頂けませんか」
「僕の名前は陽貴」
「はるき様ですか～ポカポカ暖かそうなお名前ですね」
自分の名前をそんな風に言われたのは初めてだ…父さん母さん、喜んでいいのかな？
「ところで萌月、さっき降りて来たと言ってたけどどこから降りて来たの？」
そう訊ねると君は右手を上げて夜空に浮かぶ満月を指し、
「あそこに在る月ノ都からです」
と答えた。
「えっ？」
ありえない返答に思わず声が出てしまった。
月に在る都からって…まだ人類はあの星に一度しか着陸してないし、それに人が住めるような環境じゃない。
待てよ、もしかして萌月は僕を辛かっているんじゃないか？
「ははははは、そんな冗談言っても騙されないよ。萌月ってロマンチストな子なんだね」
「冗談なんかじゃないですよ、本当だもん！」
笑い流されたことに怒ったのか萌月が膨れっ面になる。言葉遣いも感情が表れたせいで子供っぽい。
「だったら僕を月まで連れてみせてよ、そしたら冗談だなんて笑わないさ」

「いいですよ、ミルクティを飲ませて頂いたお礼に貴方を月へご招待します☆」
その返答に僕は頭が真っ白になった。

月ノ都

言葉の意味は理解できるけど本気でそんなことを言っているのかわからない。
「でも月って地球の外に浮かんでいるんだよ、ロケットに乗らないでどうやって行くの？」
「それにはこの天之羽衣を使います」
ウインクをしながらそう言った萌月はさっき見た真っ白に輝くマフラーのような物をどこからともなく取り出した。
といっても透けるほど薄いため発光していなければ持っていることさえわからないだろう。
常識的に考えると羽衣で人が空を飛べるなんて信じられないが、その不思議な輝きには実現してくれそうな魅力が宿っていた。
それに昔話では、こっそり湖で水浴びしていた天女は羽衣の力で月に帰ったと言い伝えられている。
「でも着ているのは宇宙服じゃなくてパジャマだし、酸素タンクなんて用意してないぞ…」
「大丈夫ですよ、月ノ都の住人だってそんなものを身につけてはおりません」
片手を口元に当ててお馬鹿さんねという風に笑う萌月。
常識的なことを言っただけなのになんか時代遅れな発言をしてしまったような気分だ…。
「それでは私の手に捕まってください」
細く陶器のように艶やかな左手が差し出される。
この手を握れば本当に月へ行けるのかもしれない…でも無事に帰って来られるんだろうか？
自分で望んだことなのにいざ実現する直前となると恐怖を感じる。
言われた通りにその手を握ると萌月は嬉しそうに微笑み、何やら意味の解らない言葉を呟いた。
すると、なんと二人の体が軽やかに浮かび始めた！？
「おおっ！」
未体験の感覚に思わず声が出てしまった。
さらに寒かったはずなのに寒くない、体重も気温も感じずまるで体が無くなってしまったようだ。
だんだん視界に収まらないほど大きくなる月。
ＴＶで無人探索機が撮影した月面なら観たことあるけど、まさかそこに人が住む都が在ったなんて…。
こんな空の果てまで来たのに息苦しくない、というより息をしていない！？
そこには巨大な神社のような建物や塔など、日本建築とは似て異なる建物が広がっていた。
「こんな月面に人が住む街があったなんて…」
目の前に広がる非現実的な光景に思わず口をぽかんと開けてしまった。
萌月に手を引かれるまま進み月面と都を仕切る厳島神社の鳥居によく似た門の前に着陸。
そして萌月家へと案内された。
萌月の部屋には書物がビルのように積み上げられていた。
「これは何の本？」
「支社で勤めるための教科書です」
「支社ではどんな仕事をしているの？」
「地上の人々の善行や悪行を観察して、その人に適切な出来事を与えております」
「へぇ～」
悪い事をしようとするとお天道様が見ているからやめなさいと言われるけど、お天道様は月から僕らを見ていたってことか？
「本社はどこに在るの」
「本社は太陽そのものです」
それから仕事のことや月ノ都のことをいろいろ教えてもらった。
「そろそろお別れの時ですね…陽貴様とミルクティのことは一生忘れません」
「僕も萌月と出会えたこと忘れられないと思う」
最後に地上のお土産としてミルクティの空き缶が欲しいと君が言うので月に置いて行くことにした。
空き缶だけど良かったのかな…？

ミルクティの余韻

目を開けるとそこは見慣れた天井、どうやらベッドの上で寝ていたらしい。
もしかしてさっきまでの出来事は夢だったのか…？
紅茶加電を買いに出たことや天之萌月命と出会ったこと、月ノ都に行ったことも。
・・・・・・・・・
そう思うと胸の奥から虚しさが込み上げてきた。
月に神様が住む都なんて在るわけないか…ＴＶで観た衛星映像が現実なのかな…。
でも微かにだけど紅茶加電の余韻が残っている。
・・・いや、夢なんかじゃない！　きっと萌月はいる、あの空に浮かぶ月のどこかに。

おわり